

西宮正泰を偲ぶ

家族会員 西宮 聡彦

陸軍士官学校53期生・陸軍幼年学校38期生・元陸軍少佐の西宮正泰（大正8年7月17日生）が令和4年10月18日15時39分息を引き取り、103歳3カ月の天寿を全う致しました。

陸士53期生は昭和12年1850名入校、昭和15年少尉任官のまさに戦争世代です。

大東亜戦争緒戦のエピソードとして「マレー作戦は大量生産の53期のおかげで勝ったようなものだ」と山下奉文軍司令官の述懐を父は誇らしくよく言っていました。

しかしながら、陸士53期生は終戦までに665柱の英霊が靖國の神として、実に3分の1の卒業生が戦陣に斃れました。

戦陣に斃れた英霊をお祀りするのが生き残った者の生涯の責務だと、このことも父はよく言っておりました。

戦後は、英霊をお祀りするとともに、出版社の経営、その仕事の経験

を活かし万葉集の本の出版など、ビジネスばかりでなく趣味の本づくりなどに励み、息子が言うのも憚りませんが、103歳までよく生き抜き、本人は心置きなく旅立ったことと思えます。

父のふるさととは富山県射水市（旧新湊町）です。射水の海岸は、古来「奈呉の浦」と称し（現在の富山新港）、天平18年（746）万葉集の歌人で編者の大伴家持が29歳で越中国司として着任し5年間、治世を行つた地です。夏にも雪を輝かせる立山連峰を望み、家持の詩情を大いにかきたてた景勝の地で、この地において多くの歌を残しています（家持の越中時代の歌は生涯の歌の実に半分に近い223首に及びます）。

このような田舎ですが、親戚に万葉集を趣味としている者が多く、その影響もあり父は万葉集をライフワーク（本人の言）としたようです。旧軍の葬送歌として有名な「海行かば：」の歌詞は、家持越中国守時代に作られた長歌の一節であり、このことでも「ふるさと射水」の榮譽のことだと、父が万葉集をライフワークとしたことの意義が十分理解できます。

父は一昨年（昨年）の年賀状に万葉集から家持の歌をのせました。

あたら
新しき 年の始の 初春の
今日降る雪の いやや重け吉事

あたらしい（新はアラタと読む）

年の初めの新春の今日、盛んに降りしきる雪のように、いつそう重なれ吉きことよ

また、今年の年賀状には、畏れ多くも故郷立山を歌つた昭和天皇の御製を載せました。この立山の歌は父の母の愛唱歌でした。

立山の 空にそびゆる を、しさに
ならえとぞ思ふ み代のすがたも

大正13年秋・陸軍大演習が富山の地で行われ、統監の為に当時摂政宮様（昭和天皇）は富山に行幸されました。その時仰ぎ見た立山連峰の雄大さに感動され、み代（日本の将来と西宮聡彦は勝手解釈）のすがたを立山にならえ、としてお詠みになられたものです。

息子としては父をもう一度生まれ故郷の富山に連れて行ければよかつたと少し後悔しています。